

## 勇気に関する心理学的研究の概観\*

## Overview of psychological research on courage

羽鳥 健司

(東京成徳大学)

*Kenji HATORI* (Tokyo Seitoku University)

## 要 約

本研究では、勇気に関する心理学的実証研究を概観することを目的とした。主に、勇気の特徴や定義、勇気の種類、勇気と関連する概念、勇気の測定方法について概観した。多くの研究者が共通して認識している勇気の特徴は、「内的・外的な対極があるにも関わらずある行動を起こす」であった。勇気は、「身体的勇気」、「倫理的勇気」、「個人的勇気」、「全般的勇気」等に分類されていた。勇気の関連概念として、恐怖、性格特性、自己効力感、ホープ、レジリエンス、ポジティブ感情等が挙げられ、これらの概念と勇気との関係について概観した。また、勇気の測定は、主に自己評定式の質問紙によって行われていた。

**キーワード：**勇気、身体的勇気、倫理的勇気、個人的勇気、全般的勇気

## はじめに

20世紀に入るまで、courage（以下、勇気と訳す）の研究は、主に哲学者によって行われていた。同じ活動であっても、ある人間にとっては勇気であり、ある人間にとっては臆病や軽率になることがある。アリストテレスは、勇気は軽率(rashness)と臆病(cowardice)の中間に位置するとしている(Boswell, 2004)。ストア派の哲学者にとっては、勇気は、人生の困難に直面したときに誠実性を保つものであり、実存主義者にとっては、勇気は、自由に直面したときの責任に気づくことである(Putman, 2010)。

社会によって、何が勇気行為であるのかは異なるが、勇気の価値は文化間で差異がないことが明らかにされている(Dahlsgaard, Peterson, & Seligman, 2005)。勇気は、社会的にも関心が高い。グーグルで“courage”や“bravery”や

“heroism”を検索した際にヒットするウェブページはおおよそ795,000あり、ほぼ“fear”や“anxiety”や“avoidance”でのヒット数1,190,000と同じくらいである(割合はおおよそ2:3)。

しかし、心理学者の関心は限定的である。2008年3月27日にPsychINFOで“courage”、“bravery”、“heroism”などのキーワードで検索した結果、128のエントリーが見つかったのに対して、“fear”、“anxiety”、“avoidance”では45,446のエントリーが見つかった。割合はおおよそ1:355である。勇気に関するほとんどの研究は2001年以降に出版されている。したがって、勇気の研究は始まったばかりであるといえる。

## 勇気に関する初期の心理学的研究

初期の勇気研究は、主に軍隊を対象として展開

されている。Gee (1931) は、第1次世界大戦におけるアメリカ陸軍の勇敢な兵士に与えられる表彰の記録を整理して、5つのカテゴリーを作成した。第1に「個人的勇敢さ (Individual Bravery)」である。これは戦闘中、マシンガンに銃弾を込める等のように、単独の勇気行動を表す。第2に「自発的集団的勇敢さ (Voluntary Collective Bravery)」である。これは、班や分隊や小隊等で取り組む危険な任務に自発的に参加することを表す。第3に「防衛線の勇敢さ (Line of Duty Bravery)」である。これは攻撃を受けている時に割り当てられた任務を果たすことを表す。第4に「利他的な勇敢さ (Altruistic Bravery)」である。これは、自分の身の危険を顧みずに仲間の兵士を救助することを表す。第5に「身体的強要の勇敢さ (Bravery under Physical Duress)」である。これは、負傷しているにもかかわらず任務を遂行することを表す。

Shaffer (1947) は、勇気を恐怖の減少と定義して、第2次世界大戦の空軍での戦闘を経験した兵士を対象として調査を行った。その結果、勇気を増加させる信念や活動に関する3つのカテゴリーが示された。すなわち、1) 装備の自信、乗員、指揮官、2) 効果的な活動、3) 社会的シミュレーションの3つである。外的な報酬や戦争への倫理的没入感は、恐怖を減少させなかった。

## 勇気の特徴

様々な研究者が勇気を定義しているが、定義に共通している要素として、「内的・外的な対極があるにも関わらずある行動を起こす」という点を挙げることができる (Lopez, O'Byrne, & Petersen, 2003; Peterson & Seligman, 2004a; Worline & Steen, 2004)。対極が強ければ強いほど、起こした行動はより勇気があると評価されるが、対極が強ければ強いほど行動は起こりにくい (Miller, 2002)。したがって、勇気の理論と

研究を評価するにあたって、特に恐怖のような対極の状態や特性を評価する場合は、観察対象者が勇気を持って起こした行動と観察者が勇気ある行動と見る行動を区別することが重要である (Miller, 2002)。

勇気を定義するための実証的検討は、主に2つの領域で検討されている。1つは勇気行為を行う全ての個人が有している特徴を記述することであり、もう1つは勇気の種類である。

Rate, Clarke, Lindsay, & Sternberg (2007) は、勇気の特徴について以下の4つの提案をした。つまり、勇気には、1) 「意図的 (willfulness and intentionality)」、2) 「注意深い熟慮 (mindful deliberation)」、3) 「行為者への対極する実質的なリスク (objective substantial risk to the actor)」、4) 「気高いまたは価値ある目標 (noble or worth end)」の4つの特徴が含まれるとした。恐怖は勇気行為に不可欠な要素ではなかった。恐怖は「行為者へのリスク」に含まれ (強い相関関係にある)、勇気を独自に予測するわけではなかった。他の研究では、子供は勇気についてより単純な構造を持っており年齢と共に複雑になっていくと示唆しているものがある (Szagun & Schëuble, 1997)。

起こした行動の結果との関係から勇気の特徴を記述した研究がある。Pury & Hensel (2010) は、起こした何らかの行動が成功したと認識された場合は、成功しなかったと認識される場合と比較して、より勇気のある行為であったと評定されることを示した。これは、行為者の自己評定に限らず、観察者が行為者の行為を評定した場合であっても、同様の結果であった。

## 勇気の種類

Rate et al. (2007) が全ての勇気行為に共通する中核的な特徴を調査したのに対して、Lopez et al. (2003) は勇気に関する活動の種類に焦点

を当て、「身体的勇気 (physical courage)」と「倫理的勇気 (moral courage)」を見出した。身体的勇気は、溺れている人を助ける等のように、身体的な危険に直面しているにも関わらず行動を起こすことを示し、倫理的勇気は、内部告発等のように社会的な対極に直面しているときに道徳的な原理に基づいて行動することを表す。身体的勇気および倫理的勇気の他にも、「生体勇気 (vital courage)」(Finfgeld, 1999) と「心理学的勇気 (psychological courage)」(Putman, 2004) が提唱されている。生体勇気も心理学的勇気も個人の限界を超越する点で共通しているが、生体勇気は医学的な病気に関する非常に現実的な身体的リスクとより強く関連している。これらの勇気は、直面する困難の種類が異なる。身体的勇気は身体的なリスクや困難に関連しており、倫理的勇気は社会的なリスクを伴っており、生体勇気と心理学的勇気の両方は内的な格闘を伴う (Pury, Kowalski, & Sprearman, 2007)。

他に、以下の3種類の勇気がある。「文民的勇気 (civil courage)」はリスクのありなしに関わらず道徳的な基準から見た利益に基づいて勇敢な行動をとることである (Greitemeyer, Osswald, Fischer, & Furey, 2007)。「軍事的勇気 (military courage)」は軍隊の文脈で集団のために危険を冒すことである (Castro, 2006)。「実存的勇気 (existential courage)」(Larsen & Giles, 1976) は、社会的な立場における脅威に直面したときに本来感 (authenticity) を表明することを表す。

Values in Action (VIA: Peterson & Seligman, 2004b) では普遍的な勇気の特徴が示されている。つまり「勇敢 (bravery)」— 脅威を避けない —、「勤勉 (persistence)」— 始めたことを最後までやり通す —、「誠実性 (integrity)」— オーセンティックに活動する —、「熱意 (vigor)」— エネルギーを持って状況に取り組む — である。実証的に、勤勉、

勇敢、誠実性は広範に渡る勇気の活動に共通してみられるが、熱意は共通しているわけではないことが示されている (Pury & Kowalski, 2007)。

集団に基づいた勇気の評価は、2 類型に分けられている。「個人的勇気 (personal courage)」は特定の行為者にとって勇気のある行為であり、「全般的勇気 (general courage)」は、他者が行った勇敢な行為である (Pury et al., 2007)。

## 勇気に関連する心理学的構成概念

### ネガティブな感情状態

恐怖は勇気の対極にある感情状態の1つであるという報告がなされている。Rachman (1990) は、爆弾処理係りのような勇気のいる職業の人たちの主観的な恐怖反応に関する実験を行った。その結果、勇気高群は、勇気低群と比較して、低い主観的恐怖反応を示していた (Cox, Hallam, O'Connor, & Rachman, 1983; O'Connor, Hallam, & Rachman, 1985)。Rachman (1990) は、勇気を主観的恐怖に直面した際の行動と位置付けるならば、勇気行為は、「恐怖のなさ」を表すと結論付けた。危険な軍事的職業に就いている訓練生は、訓練が進むにつれて恐怖の減少と自信の増加を示すことから、この「恐怖のなさ」は、曝露療法における恐怖の減少と類似している (Pury et al., 2007)。

恐怖は勇気に関連する唯一の感情状態ではない。Castro (2006) は勇気を、恐怖、悲しみ、怒りを伴った脅威を克服することであると定義している。

### 道徳に関連する勇気

勇気には気高い目標の追求が含まれていると定義されている (Rate et al., 2007) ことから、勇気と倫理観には何らかの関連があると考えられる。実際、最近の心理学的研究では道徳的な判断と感情との関連について述べられている (Haidt,

2001; Tangney, Stuewig, & Mashek, 2007)。例えば、Greitemeyer, et al. (2007) は、文民的勇気は不当な行為に対する憤慨と他者への共感を含んでいることを示した。また、勇気と性格特性との関連を調査した Hannah, Sweeny, & Lester (2007) は、性格特性のうち、確信、価値観、義務、無欲さ、誠実性、名誉、勇敢、忠誠心、独立心が、勇気行為と正の関連があることを示した。

倫理的な価値基準は、行為者と観察者で異なっていることがある。Silke (2004) は、以前 Becker & Eagly (2004) テロリストであった人を対象に面接調査を行った。その結果、テロリストは自分自身のことを犯罪者ではなく、兵士であると認識していることが明らかになった。テロリストの認識では、彼ら自身は恐怖を克服して危険な行為を完遂したのであり、自分たちがとった行動は正義であり、道徳的に適切であると信じられていた。

### 勇気と自己効力感、ホープ、レジリエンス、ポジティブ感情との関係

勇気は自己効力感や集団的効力感、ホープ (hope)、レジリエンス (resilience)、ポジティブ感情と正の相関関係にある (Hannah et al., 2007; Pury et al., 2007; Rachman, 1990)。また、自己効力感は全般的勇気と正の相関関係にあり、個人的勇気とは相関関係にない。一方で、恐怖は個人的勇気と正の相関関係にあり、全般的勇気と相関関係にないことが示されている (Pury et al., 2007)。

### 勇気行為に影響を与える要因

勇気行為を増加させる要因を特定する行動的介入を行った研究が4つある。Boyd & Ross (1994) は、過去の勇気行為を筆記すると、自己知覚を促す資源が増加すること示した。Finfgeld (1999) は、自分を勇気ある人間だとラベル付け

ると、生体勇気と個人的成長が促進されることを示した。また、Castro (2006) は、勇気行為は自己効力感と無償の愛を増加させ、これらがまた勇気行為を増加させることを示した。Hannah et al. (2007) は、ある行為を逆行抑制的に勇気ある行為としてラベル付けすると、より多くの勇気行動を取れるとする信念が促進されることを示した。

### 勇気と利他性

勇気行為は他者の利益と関連がある。Fagin-Jones & Midlarsky (2007) と Pury & Kowalski (2007) は、勇気行為には、親切 (kindness) が含まれていることを示した。また Becker & Eagly (2004) は、勇気行為に利他性 (altruism) への動機付け (Becker & Eagly, 2004) が含まれていることを示した。ただし、全ての勇気行為が他者の利益のために行われるわけではない。他者のために行う勇気行為に親切が含まれていることがあるのである (Pury & Kowalski, 2007)。

勇気行為は単なる利他主義とは異なっている。Greitemeyer, Fischer, Kastenmüller, & Fury (2006) は、単なる利他主義として他者への援助を取り上げ、研究参加者に他者援助を行ったときと失敗したとき、および文民的勇気行為を行ったときと失敗したときを想起するよう求めた。その結果、文民的勇気と強い関連を示したのは、危険の大きさ、技術の低さ、倫理的な感情の強さであった。ただし、実際に文民的勇気行為を行うことを予測した要因は、責任感の大きさ、介入する技術の高さ、ネガティブな結果を招く可能性の高さ、社会的な道德基準の高さ、怒りの強さであった。一方、他者援助行為と強い関連を示した要因は、共感の高さであった。

### 勇気の測定方法

勇気を測定するための尺度として、これまでに

4つの尺度が開発されている。1) Values in Action inventory of strength (VIA-IS) (Peterson & Seligman, 2004b)、2) Woodard-Pury Courage Scale (WPCS-23: Woodard & Pury, 2007)、3) The Munich Civil Courage Instrument (MuZI: Kastenmüller, Greitenmeyer, Fischer, & Frey, 2007)、4) Courage Measure (CM; Norton & Weiss, 2009) の4尺度である。

VIA-IS (Peterson & Seligman, 2004a) は、6因子の美德 (virtue) と、それぞれの美德を詳しく記述する24種類の強み (strength) で構成される。勇気は6因子の中の1つである。高い内的一貫性を示し (Park, Peterson, & Seligman, 2004; Peterson & Seligman, 2004b)、アメリカ、イギリス、日本で一致した結果が得られている (Linley, Maltby, Wood, Joseph, Harrington, Peterson, et al., 2007; Shimai, Otake, Park, Peterson, & Seligman, 2006)。強みは、文化的および人口統計学的変数や歴史的な出来事の影響を受ける (Shimai et al., 2006; Linley et al., 2007)。勇気を構成する4つ強みのうち3つ (勤勉、勇敢、誠実性) は、勇気行為を記述できるのに対して、熱意は記述できないことが示されている (Pury & Kowalski, 2007)。また、強みの一種であるホープと親切が、勇気行為を記述することが示された (Pury & Kowalski, 2007)。したがって、VIA-ISを使用する場合は、勇気を測定する際にホープと親切も同時に測定する必要がある。

WPCS-23 (Woodard & Pury, 2007) は、倫理的勇気を測定する尺度である。4因子23項目で構成されている。また、高い内的一貫性が確認されている (Woodard & Pury, 2007m)。第1因子は「職業や興味のあることを進んで行う (willingness to act for one's job or self-interest)」であり、例えば「たとえ強い社会的批判を受けたとしても、私は職業上での重要なプロジェクトを

行う (“I would accept an important project at my place of employment even though it would bring intense public criticism and publicity”）」という項目がある。第2因子は「信念に従って喜んで行動する (willingness to act for one's belief)」であり、例えば「もし国家の危機に呼ばれたら、人生を投げ出せる (If called upon during times of national emergency, I would give my life for my country) 」とう項目がある。第3因子は「特定の他者のために喜んで行動する (willingness to act despite or on behalf of specific others) 」であり、例えば「強い社会的圧力があっても、私は正しいことをやめない (Intense social pressure would not stop me from doing the right thing) 」という項目がある。第4因子は「家族に関係することでも喜んで行動する (willingness to act within a family) 」であり、例えば「家族が殺された人がいて、強い悲しみを感じていることを知っていても、私はその人にアプローチすることができる (I could approach someone whose family members had just been killed, knowing they were feeling overwhelming grief) 」という項目がある。回答者は、自分がどの程度その項目に当てはまるか尋ねられ、次にその状況で喜んで行う程度の回答を求められる (Woodard & Pury, 2007)。

MuZI (Kastenmüller, Greitenmeyer, Fischer, & Frey, 2007) は、文民的勇気を測定するための尺度である。回答者は、他者が回答者の社会的信念を脅かすような3つの状況下での回答を求められる。各状況は1) 「ネガティブ・スローガン (negative slogans) 」 (例えば「歩行者エリアで極右集団が障害者と同性愛者を蔑む演説をしている (In the pedestrian area right-wing extremists shout slogans against disabled and homosexual people) 」)、2) 「仕事場 (in the workplace) 」 (例えば「同僚の何人かが、別

の同僚を孤立させようとしている (Some of your colleagues try to isolate another colleague)」、3)「身体的暴力 (physical violence)」(例えば「地下鉄で若い女性が2人の極右から嫌がらせをされている (In the subway a young woman is bothered by two right-wing extremists)」)。この尺度は信頼性と妥当性が確認されているが、現在のところ、MuZIはドイツ人にしか使用できない (Kastenmuller et al., 2007)。

CMは12項目で構成された質問紙である (Norton & Weiss, 2009)。WPCSやMuZIとは違って、CMは特定の状況や特定のリスクに言及せずに、恐怖に直面したときの参加者の傾向を尋ねる。項目例は「私は脅威に立ち向かっていく (I tend to face my fears)」、「例え何かに脅かされても、私は後ろに下がらない (Even if something scares me, I will not back down)」などである。尺度は1因子構造で高い信頼性が確認されている。さらに、CMの得点は、クモへの恐怖を予測した。しかし、3週間前に測定したCM得点は予測しなかった (Norton & Weiss, 2009)m。

## 今後の展望

本研究は、これまでに行われた勇気の心理学的実証研究を中心に概観してきた。以下で、今後の勇気研究に求められる点を3点挙げる。

第1に、勇気と人生との関連を長期間にわたって調査した研究は、ほとんどなされていない。数少ない研究の1つでは、勇気は人生全体に必ずしもポジティブな影響を与えてないことが示されている。Walshe & Briner (2008)は、市民兵と不発弾処理係りの人を対象とした勇気行動に関する面接調査を行った結果、勇気行為についての個人的な利得はほとんどないという結果を得た。しかし、市民兵や不発弾処理係りに必要とされる勇

気は、個人的というより社会的なものであると考えられる。もし子どもの教育、出産、キャリア選択、もしくは全く知らない他者ではなくて親密な他者を助けるというような個人レベルでの人生の重要な目標を達成するための勇気行為であるならば、個人的な利得が増加する可能性があるものと考えられる。

第2に、文化的な差異も考慮する必要がある。Dahlsgaard et al. (2005)が3つの東洋の教え (儒教、老荘思想、仏教) では勇気が明確ではなかったと報告したのに対して、東洋医学では、胆嚢に勇気が確実にあるという報告もある (Yu, 2003)。日本の文化における勇気と欧米の勇気との違いを明確にする必要があるだろう。

第3に、他者の勇気行為の学習を通して、観察者の勇気行為が増加することが明らかになってきている (Worline, 2004)。この連鎖が続けば、社会的に価値のある目標である倫理的勇気や心理学的勇気を広げることができるだろう。このような行動を増加させる行動的な報酬について議論する価値があるものと考えられる。

現段階での勇気に関する心理学的研究は、勇気という構成概念を分割して操作的な定義を与え、分類し、関連する特徴を記述している段階である。

## 注

\* 本研究は、Pury & Lopez (2009) を参考にした。

## 引用文献

- Becker, S. W., & Eagly, A. H. 2004 The heroism of women and men. *American Psychologist*, **59**, 163-178.
- Boswell, J. 2004 *The life of Samuel Johnson*. Osgood. C. G. (Ed.), <http://ebooks.adelaide.edu.au/b/boswell/james/Osgood/chapter29.html>
- Boyd, J., & Ross, J. 1994 The courage tapes: A positive approach to life's challenges. *Journal of Systemic Therapies*, **13**, 64-69.

- Castro, C. 2006 Military courage. In T. W. Britt, A. B. Adler, & C. Castro (Eds.), *Military life: The psychology of serving in peace and combat: Vol. 4. Military culture* (pp.60-78). Westport, CT: Praeger Security International.
- Cox, D., Hallam, R., O'Connor, K., & Rachman, S. 1983 An experimental analysis of fearless and courage. *British Journal of Psychology*, **74**, 107-117.
- Dahlsgaard, K., Peterson, C., & Seligman, M. 2005 Shared virtue: The convergence of valued human strengths across culture and history. *Review of General Psychology*, **9**, 203-213.
- Fagin-Jones, S., & Midlarsky, E. 2007 Courageous altruism: Personal and situational correlates of rescue during the Holocaust. *Journal of Positive Psychology*, **2**, 136-147.
- Fingfeld, D. 1999 Courage as a process of pushing beyond the struggle. *Qualitative Health Research*, **9**, 803-814.
- Gee, W. 1931 Rural-urban heroism in military action. *Social Forces*, **10**, 102-111.
- Greitemeyer, T., Fischer, P., Kastenmüller, A., & Fury, D. 2006 Civil courage and helping behavior: Differences and similarities. *European Psychologist*, **11**, 90-98.
- Greitemeyer, T., Osswald, S., Fischer, P., & Frey, D. 2007 Civil courage: Implicit theories, related concepts, and measurement. *Journal of Positive Psychology*, **2**, 115-119.
- Haidt, J. 2001 The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, **108**, 814-834.
- Hannah, S., Sweeny, P., & Lester, P. 2007 Toward a courageous mindset: The subjective act and experience of courage. *Journal of Positive Psychology*, **2**, 129-135.
- Kastenmüller, A., Greitemeyer, T., Fischer, P., & Frey, D. 2007 The Munich Civil Courage Instrument: Development and validation. *Diagnostica*, **53**, 205-217.
- Larsen, K. & Giles, H. 1976 Survival or courage as human motivation: Development of an attitude scale. *Psychological Reports*, **39**, 299-302.
- Linley, P., Maltby, J., Wood, A., Joseph, S., Harrington, S., Peterson, C., et al., 2007 Character strength in the United Kingdom: The VIA inventory of strength. *Personality and Individual Differences*, **43**, 341-351.
- Lopez, S., O'Byrne, K., & Petersen, S. 2003 Profiling courage. *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp.185-197) Washington, DC: American Psychological Association.
- Miller, W. 2002 *The mystery of courage*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Norton, P. J., & Weiss, B. J. 2009 The role of courage on behavioral approach in fostering in the face-eliciting situation: A proof-of-concept pilot study. *Journal of Anxiety Disorders*, **23**, 212-217.
- O'Connor, K., Hallam, R., & Rachman, S. 1985 Fearless and courage: A replication experiment. *British Journal of Psychology*, **76**, 187-197.
- Park, N., Peterson, C., & Seligman, M. 2004 Strength of character and well-being. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 603-619.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. 2004a Assessment and applications. In C. Peterson & M. E. P. Seligman (Eds.) *Character strength and virtues: A handbook and classification*. (pp.625-644) Washington, DC: American Psychological Association.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. 2004b Assessment and applications In C. Peterson & M. E. P. Seligman (Eds.), *Character strength and virtues: A handbook and classification*. (pp.197-212) Washington, DC: American Psychological Association.

- Pury, C. L. S., & Hensel, A. D. 2010 Are courageous actions successful actions? *Journal of Positive Psychology*, *6*, 62-72.
- Pury, C. L. S., & Kowalski, R. 2007 Human strength courageous actions, and general and personal courage. *Journal of Positive Psychology*, *2*, 120-128.
- Pury, C. L. S., Kowalski, R. M., & Sprearman, M. J. 2007 Distinctions between general and personal courage. *Journal of Positive Psychology*, *2*, 99-114.
- Pury, C. L. S., & Lopez, S. J. 2009 Courage. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Oxford Handbook of Positive Psychology*. (pp. 375-382.) New York: Oxford University Press.
- Putman, D. 2004 *Psychological Courage*. Lanham, MD: University Press of America.
- Putman, D. 2010 The philosophical roots of the concept of courage. In C. L. S. Pury & S. J. Lopez (Eds.), *The psychology of Courage*. New York: APA Books.
- Rachman, S. 1990 *Fear and Courage*. New York: W. H. Freeman / Times Books / Henry Holt.
- Rate, C., Clarke, L., Lindsay, D., & Sternberg, R. 2007 Implicit theories of courage. *Journal of Positive Psychology*, *2*, 80-98.
- Shaffer, L. 1947 Fear and courage in aerial combat. *Journal of Consulting Psychology*, *11*, 137-143.
- Shimai, S., Otake, K., Park, N., Peterson, C., & Seligman, M. 2006 Convergence of character strength in American and *Japanese young adults*. *Journal of Happiness studies*, *7*, 311-322.
- Silke, A. 2004 Courage in dark places: Reflections on terrorist psychology. *Social Research*, *74*, 177-198.
- Szagun, G., & Schäuble, M. 1997 Children's and adults' understanding of the feeling experience of courage. *Cognition and Emotion*, *11*, 291-306.
- Tangney, J., Stuewig, J., & Mashek, D. 2007 Moral emotions and moral behavior. *Annual Review of Psychology*, *58*, 345-372.
- Walshe, N. D., & Briner, R. 2008 *Diffusing the courage myth: Lessons from those who know best*. Paper presented at the 2008 Academy of Management Meeting, August 8-13, Anaheim, CA.
- Woodard, C., & Pury, C. 2007 The construct of courage categorization and measurement. *Consulting Psychology Journal: Practice and Research*, *59*, 135-147.
- Worline, M. C. 2004 *Dancing the cliff edge. The place of courage in social life*. Doctoral dissertation, The University of Michigan.
- Worline, M. C., & Steen, T. A. 2004 Bravery. In C. Peterson & M. E. P. Seligman (Eds.), *Character strength and virtues: A handbook and classification*. (pp. 213-228) Washington, DC: American Psychological Association.
- Yu, N. 2003 Metaphor, body, and culture: The Chinese understanding of gallbladder and courage. *Metaphor and Symbol*, *18*, 13-31.